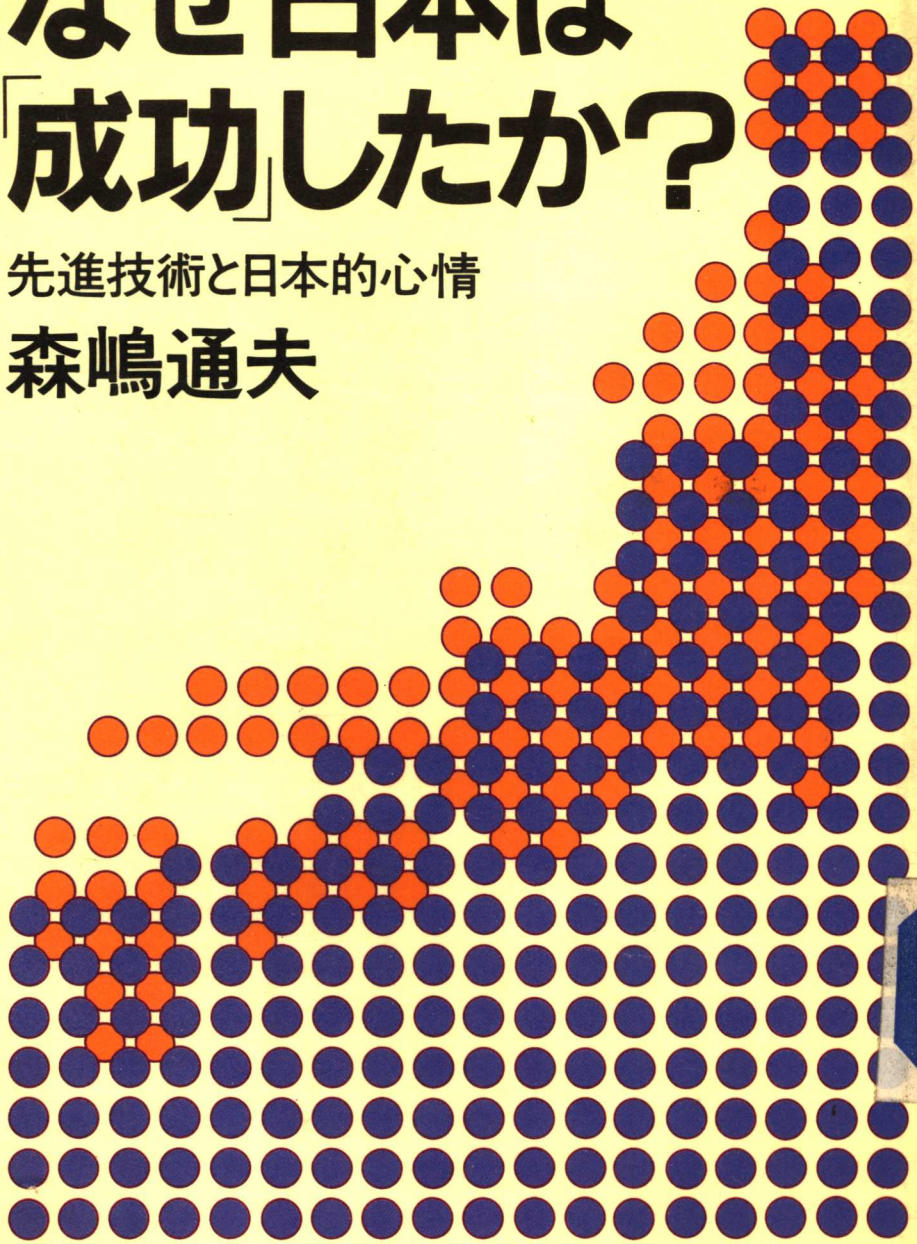
なぜ日本は「成功」したか？

先進技術と日本的心情

森嶋通夫



なぜ日本は「成功」したか？

森嶋通夫

TBSブリタニカ

なぜ日本は「成功」したか？——先進技術と日本的心情
1984年4月15日　初版発行
1984年8月25日　初版第5刷

著　者———森嶋通夫
発行者———吉田　稔
発行所———株式会社ティビーエス・ブリタニカ
〒102 東京都千代田区三番町28番地1　秀和三番町ビル
電話　販　　売 (03) 238-5721
　　顧客サービス (03) 238-5711
振替　東京1-131334
印　刷———図書印刷株式会社
製　本———大口製本印刷

©Michio Morishima, 1984
ISBN4-484-00194-2
Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ネクスト・エコノミー
——情報経済の時代

ポール・ホーケン
斎藤精一郎訳

「モノ」から情報へのメガトレンドは経済の地殻変動を起した。来たるべき経済とは？ これからの実践的戦略を説く。定価一五〇〇円

日本占領革命（上・下）
——GHQからの証言

セオドア・コーエン
大前正臣訳

戦後史のルーツ——マッカーサーの占領改革と熾烈な内部抗争を、GHQの幹部が精細に描いた〈証言・日本占領史〉。定価各二四〇〇円

総合商社
——情報戦略と全体像

井上宗迪

現役の商社エコノミストが、内部実態に基づいて書いた本格的な総合商社論。『ゼロ・サム社会』のサロー教授、推薦！ 定価九八〇円

感性革命
——「新日本人」が企業をリードする

小川　明

〝感性革命〟の時代が求めるヒトとは何か？ 組織とは何か？ 現代の企業と個人のあり方を最前線から探る十四章。 定価一二〇〇円

劇場国家日本
——日本はシナリオをつくれるか

矢野　暢

〈劇場国家〉という卓抜な発想で日本の〈原像〉を政治・社会・外交・経済・知性という側面から分析した話題の日本論。定価一三〇〇円

インダストリアル　ルネサンス
——脱成熟化時代へ

アバナシー・他
望月嘉幸監訳

テクノロジー、生産性、コスト、品質等の日米格差を実証的に分析し、〈脱成熟化〉なくして産業の再生はない、と説く。定価一四〇〇円

社会科学の現在

ダニエル・ベル
蠟山昌一訳

『脱工業社会の到来』の著者の最新著作。第二次大戦後から今日までの社会科学の成果と問題点を精細に分析する！ 定価一六〇〇円

なぜ日本は「成功」したか？

——先進技術と日本的心情

●目次

はしがき　5
お礼のことば　9
序　論
一、問題の提起　12
二、日本の理念的原動力　19
I　大化改新とその後
一、哲学の形成　34
二、クーデターとその後　44
三、儒教・道教・仏教　52
四、二重政府体制　63
II　明治維新
一、西欧との遭遇――十六、七世紀　76
二、革命への蓄熱　83

三、青写真のない革命　94
四、「イギリス革命」との比較　107

Ⅲ　大日本帝国（1）

一、第一産業革命への途　120
二、植民地帝国の実現　127
三、二重構造経済の定着　135
四、忠誠の需給の場としての企業　145

Ⅳ　大日本帝国（2）

一、明治の終焉　158
二、第二の産業革命――重工業化　165
三、「英米本位の平和主義を排す」　172
四、昭和クーデター　180

V　サンフランシスコ体制
一、新しい「君主」にしたがって　194
二、二重構造の再定着　201
三、儒教社会での階層移動　210
四、政府主導型の競争企業体制　218
結　語　231
日本語版へのあとがき　241

カバーイラスト・森嶋明夫
装　幀・西岡文彦

はしがき

本書は一九八一年三月に行われたケンブリッジ大学でのマーシャル・レクチャーの台本である。それに先だって二月に、私はさらに縮約した形の講義をサントリー・トヨタ公開講義として、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）で行った。

まず最初に、日本は成功したかどうかが問題であるが、どの国でも、すべての面で成功するということは不可能である。しかも一つの面で成功したことと、他の面で失敗したことは密接に関係しており、しばしば成功と失敗が抱き合わせでなしとげられている。日本がどの面で成功し、どの面で失敗したかを明らかにし、それらは何故そうなったかを問うのが本書のテーマであるが、しかし、本書では、これらの問題への私自身の解答を明確な形で書くことは、あえてどの章でも、差し控えている。

要約や結論の形でわざわざ書かなくても、私のいおうとすることは、読者に通じているはずだと思ったからでもあるが、もう一つには、このような問題には正解はありえず、せいぜい種々な見解がありうるにすぎないから、個人的な結論をれいれいしく書き上げて、人に押しつけるべきでないと思ったからでもある。私の分析が一面的であることや、もっと時間をかけた総合的な本格的な仕事が必要なことは、私もよく認識しているつもりである。

本書では、日本を「日本研究」という狭い視野から見ずに、マクス・ウェーバーが西欧の近代資本主義を見たと同じような眼で考察した。日本は昔から自分自身の文化をもっており、その文化環境の中で永年のあいだに日本人の気質が形成された。このような気質はもちろん物質的諸条件、したがって経済状態が変れば、それに応じて漸次変化するであろうが、逆もまた真で、経済構造や経済関係自体もまた、国民精神によって強く制約されている。たとえ物質的条件が同じでも、日本で可能なことが西欧で不可能であったり、またその逆であったりすることがしばしばある。

のちに見るように、日本社会にはきわめて特異な社会精神が支配しているが、このような倫理感情のゆえに、日本の資本主義は典型的な自由企業制度からかなり逸脱してしまっている。本書では、そのような非西洋的な態度の持主が、どうして西洋の産物である工業技術を駆使しうるようになったかを問うが、このような、各国の経済をそれぞれの国のイデオロギーの下で検討するという仕事は、中国やソビエトに対しても、インドや中近東諸国に対しても可能であり、そういう研究の現代的意義は大きい。マクス・ウェーバーの世界宗教の研究は、そのような雄大な構想の下に展開されたが、彼の個々の結論がたとえ間違っていたとしても、大勢の学者が協力してこの種の研究を進めていくことは必要である。

比較宗教学の基礎の上に比較経済体制論を構築するという壮大な仕事は、もちろん私の能力をはるかに超えているが、本書はそういう広大な学問分野の中の日本篇として書かれた。本書の序論と第Ⅰ章はウェーバー的問題構成のための下ごしらえの部分である。それらは私にとっては重要な章であるが、手っ取り早く近代の日本について知りたい人には、第Ⅱ章から第Ⅴ章までをまず読むことをすすめる。そして興味があれば（そうであることを願うが）、そのあと序論と第Ⅰ章と結語を読んでいただきたい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いままで私は、数理経済学――そこでは多くのことが数式で表現されている――の分野でのみ英語で書いてきただけであるから、大勢の語学協力者なしに本書を書くことは、私には不可能であったであろう。第Ⅰ章の原稿の英語は、プルー・ハットンとルーバ・マムフォード（と私の息子、晴夫）が訂正してくれた。第Ⅱ章はイギリスの日本研究専攻学生のために日本語の教材をつくるという目的で、一〇年近く前に書いたものだが、それはその後、渡辺英美によって英語に翻訳された。第Ⅲ章以下の各章と序論と結語は、ジャネット・ハンターが私の日本語の原稿から翻訳した。私の読みにくい原稿を妻が浄書して、ジャネットが英語に置きかえるという流れ作業のために、私は多くの時間を節約することができたし、自分の英語の限界をはるかに超えて、のびのびと書くことができた。彼女の翻訳は、イギリスにおける高い日本語研究の水準を示すものである。しかも日本歴史が専攻の彼女は、私の記憶違いや、私が忘れていた事実の存在を指摘してくれた。

最後に、本書の原稿の全部ないし一部を読んで激励とともに有益なコメントを与えてくれたラルフ・ダーレンドルフ（ＬＳＥ）、ロイ・ラドナー（Bell Institute）、建元正弘（大阪大学）の諸氏に感謝する。本書のレフェリーたちのコメントも有益であった。なお本書は、一九七八年にＬＳＥに設置されたInternational Centre for Economics and Related Disciplinesで書かれたが、同センター設立の基金を寄付してくれたサントリー株式会社の佐治敬三氏とトヨタ自動車株式会社の豊田英二氏、および設立に際して私を援助してくれたトヨタ財団の林雄二郎氏に、この機会に深く謝意を表明したい。

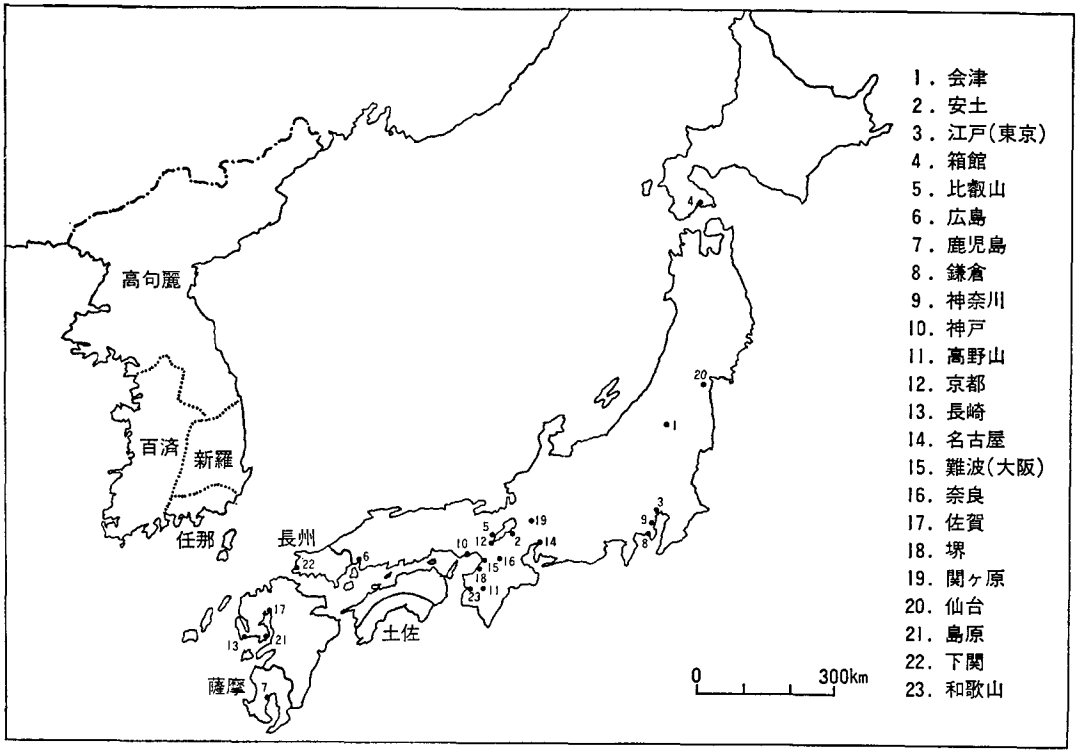
一九八一年五月

M・M

お礼のことば

私は高校時代から、歴史と社会学に興味をもっていたが、それらの学問での私の知識は狭く、しかも浅い。したがって本書は、多くの人々の著作に負っているが、とくに引用する必要のあるもののほかは一々指摘しなかった。以下に著者名を挙げて、私の謝意を記録にとどめておきたい。

安藤良雄、青山秀夫、有沢広巳、萬羽正朋、長幸男、林屋辰三郎、ヨハネス・ヒルシュマイヤー、細谷千博、貝塚茂樹、金谷治、川崎庸之、北山茂夫、小林多加士、松本清張、松下幸之助、村上重良、永原慶二、永積洋子、中山茂、奈良本辰也、野沢豊、岡義武、大川一司、大塚久雄、坂本太郎、作道洋太郎、篠原三代平、杉本勲、鈴木良一、田村圓澄、田中惣五郎、遠山茂樹、津田左右吉、和歌森太郎、渡辺照宏、和辻哲郎、山口和雄、安本美典、由井常彦。



本書に記述した主要地点および地域(朝鮮・日本)

序

論

一、問題の提起

1

マルクスは、イデオロギーや倫理は物質的条件――とくに経済状況――の反映にすぎないと主張したが、マクス・ウェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において、まったく逆の関係が成立しうることを明らかにした。すなわち、倫理が与えられると、その倫理に適合しない類の国民精神を、人々がもっていることを必要とするようなタイプの経済は、そこでは発展せず、その倫理に適合した経済が、出現せざるをえなくなると考えたのである。彼が世界の主要な宗教を吟味したのはこういう観点からであった。(1)

儒教に関する彼の結論は、次のように要約しうる。すなわち儒教はピュリタニズムと同様に合理的であるが、ピュリタン的合理主義が現世を合理的に支配しようとしたのに反し、儒教的合理主義は現世に対して合理的に適応しようとしている点で、両者は決定的に異なっている。そしてこのような儒教徒の態度こそが、中国で近代資本主義が発生するのを阻止した有力な要因である、とウェーバーは考えた。

しかしながら、このような診断にもかかわらず彼は、別の箇所では次のようにいっている。「中国人は、日本人以上とはいえなくても、多分、同じ程度には資本主義――近代文化圏において、技術的にも

経済的にも十分な発展をとげた資本主義――を消化吸収する能力をもっているかもしれない[2]」

しかし日本のイデオロギー――少くとも日本のイデオロギーの中で最も重要なもの――が、中国同様、儒教であるという事実を忘れてはならない。ウェーバーは日本についてほとんど何らの考察も積極的にしていないので、彼が日本を儒教国と考えていたかどうかは、少くとも彼の『儒教と道教』からはよくわからない[3]。さらにまた日本人は近代資本主義をわがものにしたと彼はいうが、日本人が習得した「資本主義」が、プロテスタントの倫理に整合的な「近代資本主義」と同種類であると彼が考えていたかどうかも不明である。この点に関してもウェーバーには積極的な言及はないが、にもかかわらず、上記の引用文は新しい線での研究の可能性を十分示唆している。

以下において私は、日本の儒教と中国の儒教は、若干の重要な側面で非常に異なっていることを、まず明らかにする。それのみでなく、儒教と同時に日本に伝わった道教も、非常に変質、転化して日本の神道となった。ちょうどヨーロッパにおいて同じバイブルを異なったように解釈することによって、プロテスタントがカソリックから分かれ、謀反者たちがまったく新しい職業倫理――ウェーバーのいわゆる「近代資本主義の精神」――を築き上げたと同様に、日本の儒教も中国の儒教と同じ教典から出発したが、異なった学び取り方をしたために、中国とはまったく異なった国民の気風が日本で醸成された。地つづきのヨーロッパ――中国本土や朝鮮半島からの日本の距離と比較すれば、英仏海峡でへだてられているブリテン島などは地つづきも同然であった――では、最初にカソリックが伝播してしまったから、それから脱却するためには謀反ないし革命が必要であった。

孤立した日本では中国儒教がそのままの形で流布することは不可能で、日本人流の受け取り方や、解

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com